「六ヶ所村ラプソディー」を視られよ

奇っ怪ニッポン

田中康夫

仮に然したる「想像力・洞察力・直感力」を我々が持ち合わせていなくとも、その3要素を研ぎ澄ますべく一人ひとりが奮励すべきなのです。21世紀が〝再生の時代〟たり得る為にも。

「不都合な真実」と「六ヶ所村ラプソディー」の映画2本を観た僕は改めて「怯まず・屈せず・逃げず」に生き続けねば、と心に誓いました。

ビル・クリントン政権で副大統領を務めたアル・ゴア氏が語り部として登場する前者は、映像と数値を駆使して、地球温暖化が齎す地球環境の汚染を警告し、我々に行動を呼び掛けます。即ち、北極の氷が過去40年間に40%も縮小し、今後50～70年で北極は完全に消滅し、全世界の水位が6㍍も上昇するであろう変化は、既に地球上で猛威を振るう鳥インフルエンザやSARSといった奇病、想像を絶する惨劇だったハリケーン・カトリーナの発生と無関係ではない。少なくとも、そうした捉え方を共有すべきなのだ、と。「これ程にも明白な警告が、指導者の耳に届いてないのではと懸念せざるを得ないのは何故なのか？　その現実を認めた瞬間、道義的行動を余儀なくされると知ったればこそ、敢えて地球が発する警告を無視しておこう、と高を括っているのだろうか？が、不都合な真実は消え去る訳もなく、目を背け続ける問にも危機は猛烈な速度で増殖し続けていくのだ」。

「温暖化など、取るに足らぬ問題である」と就任直後に高言したジョージ・W・ブッシュに絶望しながらも彼は、人を信ずればこそ、世界中でスライドを見せ、「温暖化は、科学だけの問題ではない。政治だけの問題でもない。これは倫理の問題なのだ」と、説き続ける旅を重ねています。

鎌仲ひとみ監督が青森県六ヶ所村を舞台に「単純な二項対立の構図ではなく、混沌とした複雑な現実や、賛成や反対の間で揺れる村人の思いや、その有り様の多様さこそを描こう」と紡ぎ上げた「六ヶ所村ラプソディー」も又、「不都合な真実」に対する「想像力・洞察力・直感力」の重要さを、静かに我々に問い掛ける秀作です。

55基の原子力発電所が存在する日本列島の「外れ」に位置する下北半島の六ヶ所村には、イギリス、フランスに続いて世界で3番目の使用済み核燃料再処理工場が竣工し、試験運用が開始されているのです。その六ヶ所村周辺で疑問を抱く農漁業者、逆に期待を抱く建設業者。そこで勤務する以外に生活の糧を得られぬと語る従業員。淡々と彼等や彼女等の言葉と表情を写し出す鎌仲監督は、事故を契機に閉鎖が決定したイギリスのセラフィールド再処理工場にも赴き、周辺では小児白血病の発症率が10倍に達していた事実、その沖合では奇形の海老が採取される事実をも、同じく淡々と語る地元民を写し出します。東中野駅前に位置するポレポレ東中野（☎03・3371・0088）で9日（金）まで上映中の「六ヶ所村ラプソディー」。

「そこに矛盾があっても写し出す映画」として、一人でも多くの人々に観て欲しい作品です。豊かな日本が抱える「不都合な真実」に対する「想像力・洞察力・直感力」を我々が高め、感謝して貰える未来を実現する21世紀たり得ん、と「怯まず・屈せず・逃げず」に生き続けるアル・ゴアに続く為にも。

（毎週水曜掲載）